

非言語教材を用いた国語教育を活性化するための実践的研究 ——アダプテーション教育の構築に向けて

大井田義彰（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座日本文学分野）
○疋田雅昭（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座日本文学分野）
伊藤かおり（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座日本文学分野）
大澤千恵子（東京学芸大学日本語・日本文学研究講座国語科教育学分野）
山根正博（東京学芸大学附属国際中等教育学校・国語科）
扇田浩水（元東京学芸大学附属世田谷中学校・国語科）
渡邊 裕（東京学芸大学附属世田谷中学校・国語科）
高須みどり（東京学芸大学附属竹早小学校・国語科）
大島静恵（東京学芸大学附属世田谷小学校・国語科）
陳 知清（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・言語文化系）
早川香世（東京都立国際高等学校・国語科）

代表者連絡先：ooida@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】アダプテーション・間テキスト性・非言語教材・国語教育・授業実践

1 はじめに

平成 27 年の中央教育審議会の答申では、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力を育む指導力」を身に付けることが教員養成の課題として指摘されている。これを受けて、教育現場では教員よりも学習者が主体的に授業を進めることを重視し、アクティブ・ラーニングや協同的な学びを目指した実践が重ねられてきた。しかし、こうした授業実践は学習者自身ですでに身に付けてきた思考力や表現力に依存しており、教員側の働きかけが必ずしも学習者の能力や技術を段階的に向上させるような取り組みになっていない現状がある。とくに国語科では、「他者の意見を聞き、話し合う喜びを感じる」といった感覚的な内省にとどまらず、学習者が自らの分析的思考力や言語表現技術の向上を実感できる授業実践を目指すことが課題となっている。

そこで東京学芸大学の日本語・日本文学研究講座所属の教員と、主に同大学の附属学校に勤務する教員とを併せた計 11 名よりなるメンバーで企画された本プロジェクトでは、近年、文学研究や文化研究あるいはまた翻訳研究といった分野で注目され、徐々に浸透しつつあるアダプテーション（adaptation / 翻案・適応）の考え方を教育実践に応用し、国語教育をより活性化できないかという見通しのもと、検討を開始した。もちろんアダプテーションという概念そのものが、ま

だ必ずしも明確に定義されているとはいえないうえ、教育といったいどれほど親和性を持つのかも明らかではないため、このプロジェクトでは、そもそもアダプテーションとはどういう方法で、これまで関連する研究の中でどう扱われてきたのかというごく初歩的なところから勉強を始めなくてはならなかったが、それでも開始して2年を経、コロナ禍の中で多々制約はあったものの、プロジェクト参加者全員がそれぞれ一定の手応えを感じ得た。たしかに今回のプロジェクトの成果を広く国語教育一般に応用するにはまだまだ先が長いといわざるを得ないが、今後の考察の一助とするため、以下に本プロジェクトの目的と内容及び成果と課題について、ごく簡単に報告する。

2 本プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、これまで主に言語教材の解釈や鑑賞が中心であった国語教育に非言語教材を持ち込み、その扱い方を検討することによって、昔から教え方がほぼ定まっていた比較的变化に乏しかったように思える国語教育を活性化することである。むろん、ただ単に非言語教材を導入するだけなら、いままでも国語の授業実践の中でそれなりになされてこなかったわけではないが、そうした場合、大概非言語教材は言語教材の補足あるいは下位的役割を担われ、最終的な成果はどうしても、その教材の典拠や基になっている言語教材の捉え方に委ねられがちであった。

そこで本プロジェクトでは、これまで独創的なテキストとされてきたものとその模倣とされてきたものとの位置づけに革新をもたらし、主に非言語芸術の見方、捉え方を変えつつあるアダプテーションという考え方を採り入れ、国語教育を新たな観点から見直し、学習者に従来のものとはやや異なった感性や認識力等を身に付けてもらえないかと考えた。近年 ICT 等の普及で劇的变化を遂げつつある社会や教育に即応する「知」の育成である。そして、そうした方法と実践をかりに「アダプテーション教育」と名付け、いつかそれが広く普及し、国語の授業の一部ででも採り入れられる時が来ることを目論んで、まずはその下地を作っておくことを試みた。従来の国語教育での非言語教材の扱いとどう異なった観点や教育方法を提案できるか、また、単なる理論構築だけでなく、どこまで具体的な授業案を提案できるかも本プロジェクトの目的といえる。

3 本プロジェクトの内容

上述したように、近年よく目にするようになったアダプテーションだが、その受け止め方は論者によってさまざまで、まだその内実からして明確に定義されているとはいえない。そこで本プロジェクトではまずアダプテーションとは何かということを参加メンバー全員で確認した後、国語教育との相性の善し悪しを検討し、それを国語教育における新たな理論作りや教育実践に応用

してみることにした。具体的には最初に皆でアダプテーション理論の基本とされるリンダ・ハッチオンの『アダプテーション理論』(晃洋書房 2021 年)を読み込み、一定の認識を共有したうえで、国語教科書に長く掲載され続けてきた定番教材とともに、これまで副教材として使用されてきた挿絵やアニメーション、朗読テープなどの図像、映像、音声を一つの单元の中で相互に議論することを可能にした自立した教材として扱う授業方法を検討していく。

アダプテーションでは、先行する作品(「オリジナル」と目されるもの)と翻案作品(語り直されたもの)との関わりを踏まえたうえで、これまで二次的産物としか扱われず、正当な「鑑賞」の対象外とされていた視聴覚テキストを文字テキストと同等な関係のものとして分析・考察する。そうしたアダプテーションの理論を国語科の実践とともに検討することで、その分析対象の特色(語りの特徴・レトリック・加えられた要素・移植された文化的背景など)やジャンルの問題(表現媒体による偏向など)を学習者が発見し、それらを伝える表現力を養う授業方法を提案していく。視聴覚資料を研究対象に加えた点には、翻案作品の特性を考慮するだけでなく、文字テキストと同様に図像及び映像テキストのリテラシーも求められる次世代の学習者を取り巻く社会的要請に応える意味がある。これが本プロジェクトの一番の独創的な点であると考えているが、個々の提案は新型コロナでかなり研究が制限されてしまったこともあり、結局、参加メンバーそれぞれの検討に任せることになってしまった。

4 成果と課題

本プロジェクトの成果としては、何より 2021 年 3 月と 22 年 3 月に刊行した 2 冊の報告書(有限会社ピクセル刊)が挙げられる。21 年のものにはプロジェクト参加者 8 名の、22 年のものには 7 名の研究成果が掲げられており、2 年間の本プロジェクトでどのような議論がなされてきたのかおおよそは窺えると思う。

課題としては、個々人に委ねざるを得なかった報告書の内容が多岐にわたっていてまとまりに欠け、具体的な成果が乏しいことや、通常の国語教育での非言語教材の扱い方と、アダプテーションとしての取り上げ方の違いがまだ明確でないこと、また、そうした授業方法を導入した場合の最終的評価の仕方が曖昧なまま残されてしまったことなどが挙げられるが、今回のプロジェクトで掲げた「アダプテーション教育の構築」というテーマがあまりに大きすぎたうえ、開始早々新型コロナ騒動が勃発して、とくに最初の 1 年間、オンラインでしか会議が開けず、授業実践の参観もまったくできなかったため、ある意味仕方がなかった面もある。もちろん、2 年目は多少進展したのだが、1 年目の出遅れが響き、結局 2 冊の報告書以上の成果を挙げることはできなかった。その辺、若干の悔いは残るが、ただ少なくともこの報告書は今後続く研究の一つの、また、確実な足掛かりになると思う。

以上

